

終戦はシットタンで知りました。

武装解除はタイ国のチェンマイに集結してから行うとの事で、国境越えてチェンマイに到着し、英軍の手で武装解除されました。

その後、南下してバンコク港の近くのナコンナヨークで英軍管理の下で抑留生活に入り、昭和二十一年二月一日に懐かしい原隊に合流、歩兵砲中隊に復帰しました。英軍の給与は案に相違して良好でした。作業は軽作業が主で道路整備と清掃等の楽な作業でした。

昭和二十一年五月十五日、バンコク港で二〇〇〇トンの軍艦に乗りました。五百人位の集団で、部隊本部と通信隊と砲兵が主でした。

五月二十四日、広島の大竹港に上陸、海軍水雷学校で二年半ぶりに故国の空気を胸いっぱい吸い込みました。

五月二十六日午後、大竹出発、翌二十七日懐かしの自宅に帰りました。

二年半全くの音信不通だったので生還は諦めていたそうであげて大喜びでした。

昭和二十二年に結婚し二男二女の親となり、父の跡をついで現在農業に従事して、野菜を主にミカン作りに精を出しております。

ビルマの戦場で知った

戦争の残酷さ

滋賀県 小林 育三郎

私は、大正八（一九一九）年十二月に守山市で生まれました。

県立八幡商業学校卒業、三井物産に入社致しました。昭和十五（一九四〇）年十二月、歩兵第三十七連隊に入営しまして、直ちに中支に派遣され、南京にて初年兵教育を受けました。特別幹部候補生の試験に合格、昭和十七年三月、久留米陸軍予備士官学校入学、六カ月の訓練を経て任官、敦賀歩兵第一一九連隊に転属いたしました。昭和十八年十二月に動員下令、ビルマ戦線で戦い、重機関銃中隊長として苦闘いたしました。

た。

以上が私の略歴でございますが、二十歳代の青春は、全部軍隊、兵隊、戦争、戦場でございます。軍隊の中にはいろいろな兵科がございますが、情報隊とか無線隊とか特殊なものや、航空兵とか戦車兵とか華々しい兵科もございます。私は歩兵でございました。軍隊では歩兵は消耗品と、何ぼでも使い捨てできると言われたのですが、しかし、その歩兵は最前線で戦い、一番重要なところで戦うのが歩兵でございます。私は、その歩兵の中で重機関銃を担当させられました。

重機関銃というのは、両手で「ダダダダ……」と撃ちますと二〇発連続して出るので、威力があり、一番大事な所を、言いかえると一番危ない所で戦争をしてまいりました。

敵が見えるような近い所もありました。そのような戦いというものを身、肌で充分体験してまいりましたので、そんなことを語りしたいと思います。

皇紀二六〇〇年、これが昭和十五年でございます。この年、私は軍隊に入りました。二六〇〇年は日本中、奉祝で沸いていた時でございます。金鶏輝く日本の……」と歌われ、同時に第十二回のオリンピックを東京でやろうということになっていたので、けれども、もうこの年には中国と戦火を交えて三年経っておりまして、食料、燃料も不足がちに逼迫してまいりまして、世の中がだんだんと暗くなって来まして。この年の十二月に、私は入営致しました。

当時入営する時には、「祝 入営 小林育三郎君」と書かれた大きな幟を家の前に掲げたものでございます。私が勤めていた会社から頂いたものでございますが、こういうものを街中に出しますと、この町から何人応召する、入営するということが世間に分かるものですから、こういうものは、これが最後になったと思えます。

そしてこれが掲げてありますと、近所の人は「お宅はいよいよご出発で」と言い、本人は「天皇陛下のために征ってきます」と心にもないことを言った訳で

す。

ここに講談社から出ている「昭和万葉集」という本のなかに話題となった一首がございます。

「探しものありといざない 夜の蔵に

明日征く夫は 我を抱きしむ」

「探しものがあるから、ちょっと来い」と言い、夜の蔵へ連れて行って、探しものがあるというのは口実で、ここで初めて夫婦の別れを惜しんだ、という歌です。悲しい別れをして出て行った情景ですね。

私は、この十二月一日に福知山の連隊（歩兵第二十連隊）に入隊しまして、以来八年間に及ぶ軍隊生活が始まりました。福知山では軍服を着せられ、すぐに玄界灘を渡り南京に入りまして、昭和十六年の正月は南京で過ごしました。初年兵で星一つなのです。軍隊は何でもラップバでやります。起床も食事も消灯も全部ラップバです。その消灯ラップバというのが哀調を帯びたものでした。「初年兵は可哀相だな、また寝て泣くのかな」と、これが真つ暗な宮庭に鳴りますと、本当に

泣けたものです。

幹候の試験に合格すると内地へ帰ってこられるものですから、内地へ帰りたい、帰りたいと言って頑張りましたのは九カ月で、昭和十六年十月に久留米第一陸軍予備士官学校に入校しました。

学校へ来ると「今日の天候はお前たちの前途を占うようなものである」と言われたのですが、全くその通りでございました。その年の十二月八日に太平洋戦争が勃発致しました。ちょうど二十二歳の私の誕生日でございました。「大日本帝国陸軍の興廃は、お前たちの下級将校の双肩にあり」と言われまして、月月火水木金と毎日毎日が訓練、訓練で、六カ月絞られまして、昭和十七年三月に卒業致しました。成績の悪かったものは原隊に復帰と申しまして、皆帰って行きました。私は福井県敦賀の第二一九連隊に転属致しました。人間の運命というものは分からないものでございまして、一緒に南京へ行った連中は、その後、インパール作戦に行きまして全員死んでしまいました。

敦賀では補充兵や応召してきた兵を教育して前線へ送り出す仕事をしておりました。当時は陸軍少尉に任官しておりました。当時は、「兵隊さん、兵隊さん」ともてはやされた時代でございました。「撃ちてし止まむ」とか「神州不滅」「鬼畜米英」「欲しがりません勝つまでは」と言う風な言葉の流行った時で、「肩を並べて兄さんと、今日も学校へ行けるのは、兵隊さんのお陰です」「兵隊さんよありがとう、兵隊さんよありがとう」と兵隊さんがもてはやされた時代でした。私の八十年の人生の中で、一番華やいた時代だったと思いますが、しかしそれもしばらく、極楽は地獄に変わりました。

第一一九連隊に動員が下令され、連隊挙げて戦場へ行くことになりました。すぐ新品の夏服が支給され、南方へ行くことはまずすぐに分かりました。どんどん召集兵が入ってきて、本当に蜂の巣を突ついていたような混乱を見せたのですが、約十日間ほどで動員は完結し、いつでも南方へ出動できる体制は整いました。けれども、その当時、日本の近海には敵の潜水艦が跳

梁しており、南方へ行く船が海の藻屑と消えることが多くなったのです。そのため大船団を組んで護衛を付けて行かないと、とても南方へ行けないということ、しばらく待機せよと言われ、我々は敦賀の連隊を出、今津饗野野廠舎で約三カ月待命、船団が編制されるのを待つておりました。

昭和十九年三月二十一日、廠舎を出ました。ちょうど三月の彼岸の日でしたが、寒い日で、桜と雪に見送られて出発致しました。

親父が見送りに来ておりました。涙もろい親父で、ポロポロ泣いておりました。これが本当に最後でございました。それから広島へ行き、宇品から南方へ向かいました。南のどこへ行くかは分かりませんでした。

船はどんどん進んで行きます。大船団を組んで進んで行きました。「ああ堂々の輸送船……栄あれ」という軍歌のように、何十隻という堂々の輸送船で、横には駆逐艦が護衛して、本当に堂々の船団を組みまして南へ南へと行きました。

仏印のサイゴンへ寄って、さらに南へ行き、四月十六日に無事にシンガポールに上陸致しました。当時昭南島と言いましたが、いよいよ戦場についた訳です。初めての戦場ですが、戦争がどんなものでどんな残酷なものであるか、当時は想像以上には知りません。

その当時、インパール作戦が開始されておりました。インパールというのはインドの街の名前で、そこから中国の雲南省の蔣介石のところへ種々の援助物資が運ばれている、それでインパールを攻めて、蔣介石への戦略物資の輸送を絶つべし、というのがインパール作戦でした。

インパール作戦には約七万の将兵が投入されたのですが、昭和十九年の四月、わが軍が苦戦中とのことで、救援を命ぜられたのですが、このインパール作戦は補給を全然考えない、ムチャクチャな作戦でした。

私たちはシンガポールから、すぐにインパールへ救援に行けと言われましたが、陸路では間に合わないから飛行機でインパールまで行くことになり、戦争は全

然恐いということは知らなかった私たちは、飛行機に乗れると喜びました。飛行機といっても爆撃機で、爆弾倉と言う爆弾を入れる所に人間が押し込まれまして、ビルマのラングーンまで空輸されました。

しかし、もうラングーンへ着いた時にはインパールは撤退することになっていまして、私たちは、もうインパールに行くこともなく、北転してどんどん北上して行きました。敵の方へ向かって行ったのは、その時だけでした。それから後は、退却、退却の反転でございました。

昭和十九年六月、ビルマには雨季と乾季がありまして、雨季は日本の梅雨のようで、七月頃から九月頃までです。乾季は十月から翌年の三月頃までです。ちょうどその雨季の最中でした。制空権は完全に敵の手にあり、日本の飛行機は一機も飛んでおりません。

もう追い詰められて退却する一方で、しかも雨中、日中は行動できません。夜になるのを待って行動す

る。雨中の艱難辛苦、本当に悲惨な戦争でした。

その日も雨中でズブ濡れで、腹も減っておりまして。そして食べることもよりも寝ることでした。どこか乾いた所があれば横になって寝たい、という思いでおりました。夜も白んで参りました。どこか早く隠れないと敵の飛行機に見付かる訳です。実はそういつた時に、前方に土民の部落が見えました。もちろん、戦場ですから土民は逃げておりません。ただ軍の命令によって絶対にその部落に入ってはいけない、その部落に入ると、動くものがあれば、それは退却中の日本兵が入ったと、すぐ分かって銃撃されるから決して入ってはいけない、とそのように喧しく言われていたのですが、ズブ濡れで腹も減っておりましてので、その危険を冒して、その部落の家に入りました。そしてすぐに寝てしまったのです。

二時間ほど経ったでしょうか、敵の飛行機が、部落の真上に来ました。それで気が付いて「飛行機だぞ！」と言ったが逃げる所もないので、そこに伏せていました。が、銃撃を受けました。「ヒャー、バリバリ」

という猛烈な銃撃で、私の横に伏せていた石川と言う上等兵が「ぎゃー！」と言って絶叫を上げました。

見たら、石川の大腿部から血が噴き出しています。機銃弾が貫通したのです。すぐに顔は紫色になってゆきます。もう手当もできません。動くのは口だけです。何か言いたがっているのです。私は膝の上に石川を抱き上げて、「石川！ 何か！ しっかりせい、何を言いたいのや」と言うたら、石川が最期に言ったのは「おっ母あー！」という言葉だったのです。故郷の日本の古里を思い浮かべたのでしょうか。私の膝は二十年前、歌を歌った母親の膝だったのかもしれない。間もなく死んでゆきました。

昭和二十年三月になって、メイクテラ飛行場の争奪戦がありました。この飛行場を敵に取られますと、敵が爆撃に利用するものですから、絶対に敵に渡してはならぬと言う命令があり、死守すると言う話がありました。そして、そこへは戦車がやって来ました。猛烈に撃ってきます。

当時の我々が話し合うことは、帰ったら何が食べた
い、寿司、天ぷらそば、など食い物の話ばかりです。
青地中隊長は召集でこられた方で、奥さんの写真を
持っておられました。「ベッピンやろ」としょっちゅ
う言っていました。「別品の奥さんが産んだ息子は男
前だろう」と言って、男の子の写真が送られてくるの
を待っておられたのですが、その写真を見ることなく
戦死されたのです。

先程まで皆がいた所へ、当番を連れて二人で行きま
した。五分たち、戦車が去って、前の所へ当番に見に
やりますと、五分前まで寿司、天ぷらと言っていた連
中が全員死んでいました。

当時の戦死者の名簿を持っていますが、それには、
「二〇、三、二七メーカーラ飛行場で頭部貫通銃創、
戦死 兵長〇〇〇〇」等と九人全部が、場所も同じ、
時間も同じ、で死んでいます。九人死ぬということは
大変なことなのですが、軍隊では一切、「同じ、同じ」
で書きます。いかに人の命が粗末にされていたかとい
うことです。

また私は当時の日記を持っております。戦闘間の日
記でして、昭和十九年、昭和二十年、ずーっと戦争の
間日記を付けておりました。日記は小学校四年の時か
ら七十年間付けております。「日記を書いているが、
生きて帰るつもりか」「持って帰ろうと思っているの
か」などと皆に言われたものです。もちろん、生きて
持って帰れるとは思ってもいませんでした。が、どこ
そこでは生きておった、という印にと思って、この日
記を書いていたのです。表紙に手製のカレンダーを書
いて、それに印を着けていたのです。今日は生きてい
たな、という印でした。

この日記は、戦後「ビルマ戦場日記」として出版し
ました。(叢文社 一九八一年八月刊行 二七八ペー
ジ 一六〇〇円)

昭和二十年六月になりますと敗色濃厚で、逃げては
かりでした。雨の中、その道の両側に死んでいるの
で、臭いがします。歩く前から「そこに死体がある
ぞ、踏むなよ」と後へ後へとやってくるのですが、私

たちは最後で、すぐ後はもう敵です。その死体は戦闘があつて死んだのではないのです。私らより先に退却して死んでいった兵隊たちなのです。なぜ、その兵隊たちは死んでいったか。

軍隊は第一戦で戦闘しています。するとアマーバ赤痢、マラリア、脚気、怪我をした兵隊は戦力にならないし、足手まといです。それで後へ後へと下げるのです。後には野戦病院があることになっていきます。そして兵隊たちは三人、五人とまとまって歩き下がって行く訳です。三人、五人ですから昼間も歩けます。自動車など、とんでもないことです。けれども病人です。怪我をしていて、まともには歩けない。疲労と体力がなく、座りこんだそこが墓場なのです。そこで死んでいったのです。

その死体は本当に、右に、左に、そこに、ここに、死屍累々と言いますが、正に死屍累々と文字通りです。

私は、その死体を見ながら思ったのです。この兵隊たちは来たたくてビルマへ来たのではない。一枚の召集

令状で、親子の絆、夫婦の情、それを引き裂いてもビルマへ連れてこられて、ビルマの山の道の側で死んでいるのです。留守宅の家族は陰膳を供えて「元気でいてくれよ、早く帰ってきてくれよ」と、死んでいるとは知る由もありません。そう思った時、何と戦争は残酷なものだろう、非常なものだろうと思いました。その時のその死体を調べれば、ポケットに写真などもあつて、どこの誰だか分かったでしょうが、私どもは、とても敵に追われていて、先を急いだので無理でした。

戦争というのは、人が人を殺すのですね。この私たちの社会では、人を殺すと罪になって罪を償わなくてはなりません。二人、三人、うんと殺せば死刑になります。死んでその罪を償わなくてはなりません。しかし戦争はそうではありません。たくさん殺すほど手柄になります。殊勲には甲と乙があるのです。たくさん殺した方が甲になるのです。こんな馬鹿なことなどあつていいものでしょうか。私は戦争はいけない、残

忍なもの残酷なものだと思えます。

現在、私の家は新聞販売店でございます。この新聞販売店は明治四十三（一九一〇）年、九〇年前に父が始まして、現在三代目が店を継いでおり、私は二代目でありますが、今でも毎日、夕刊一〇〇枚ほど配達しております。